



2017. 11. 1

## 11月ようちえんだより

西神戸 YMCA 幼稚園

時折吹き寄せる冷たい風に秋の深まりを感じる今日この頃ですが、先日は季節はずれの大きな台風が日本列島に上陸しました。今回のような勢力を保ったままでこの時期に上陸するのは、なんと91年ぶりということで、神戸への直撃は免れたものの、強風に加えて大雨などによる様々な被害が全国的に報告されました。最近では異常気象のことがよく取りざたされ「季節はずれの」「数十年ぶりの」「観測史上初めて」というニュースをよく耳にするようになりました。この異常気象については自然本来のバランスを保とうとする「自然のゆらぎ」が大きな原因のようですが、地球温暖化による影響も大きく関与しているのも確かなようです。人間が便利さを追求するあまり様々な不具合をおこし、自然界のバランスを保とうとする力に大きな影響を与えていることを私たちは自覚しなければなりません。

宇宙で生命が誕生する確率はバラバラにした時計のすべての部品を太平洋に流し潮の流れによってそれぞれの部品が交じり合ってもとの時計が組み立てられるぐらいの確率だと言われています。想像するにまず、不可能としか思えません、この地球上に生命が誕生している以上、その限りなくゼロに近い確率の事象が起こったということです。そこには何らかの意志が存在していると考えられるのは当然のことではないでしょうか。私たち人間は生きていくうえで多くの自然の恩恵に与っていますし、限りなくゼロに近い確率で誕生した生命を食し生命を保っています。他の生命を食べて生命を維持している私たち人間が他の何かに食べられることはありませんが、それは人間が古来から身につけてきた知恵と知識で安全を手に入れたにすぎないのであって、決して人間が自然界のトップに存在していると言うものではないのです。確かに、人間の生命を脅かす天敵は地球上には存在しなくなっていますが、そこに人類の驕りがあるように思えます。まるで地球上のものがすべて人間のものであるかのように自然の資源を思うように使い、大気汚染や土壌汚染など平気で環境破壊を行っている。そこには自然への畏敬の念や感謝は微塵も無いように感じられるのです。このまま資源を思うように使い、すべてが人間の意志によって使用できると勘違いしていれば地球上の環境破壊は止むことがないかもしれません。このままでは、人間の存在が地球のがん細胞のように言われても仕方がないのではないのでしょうか。

11月には収穫感謝礼拝が行われます。子どもたちは、日ごろ食している生命に目を向け収穫の喜びを分かち合う礼拝となります。礼拝後は年長児がそれぞれの家庭からひとつずつ持ち寄ったいろいろな野菜を皆で調理して味噌汁を作ります。食べる前に収穫を祝い、生命の尊さを知り、生命を食していることを実感することで感謝のときとなります。そのような経験を通して自分たちは自然の中の一員であり、一部であることを理解していけるのだと思っています。この子たちの将来が、環境破壊によって生活が脅かされる世界とならないように、今の私たちが自然の恩恵や賜物に感謝し、そして子どもたちとともに感謝する気持ちを育んでいく必要があることを忘れないでいたいと思います。

年主題 『愛されて育つ』

<年主題聖句> 「あなたがたは神に愛されている子供です。」

(エフェソの信徒への手紙5章1節)

11月主題 「ありがとう」

聖句 “二人または三人が私の名によって

集まるところには、わたしもその中にいる”

(マタイによる福音書18章20節)